

日文 教授用資料

子ども とつくる 図工の時間

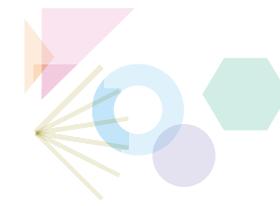
西村 德行 編著

本資料は一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則り、配布を許可されているものです。

日文の実践事例、教科情報

詳しくはWebへ!

平成27年(2015年)度版 小学校図画工作科内容解説資料として扱われます。



子どもとつくる図工の時間

日文 教授用資料

平成30年(2018年)8月17日発行

編集・発行人 佐々木秀樹

発行所 日本文教出版株式会社
〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33363

日本文教出版 株式会社
<http://www.nichibun-g.co.jp/>

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171
東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618
九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938
東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1-13-18-7F-B
TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261
北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690

未来をにう子どもたちへ
日本文教出版

🍷 しはじめに

「次の図工の時間、どんな授業にしようかな」

そう考えるとき、ワクワクしていますか、それともモヤモヤしていますか。



数年前まで、私は小学校教諭でした。当時勤務していたのが研究校だったこともあり、日々アンテナを張りながら授業づくりをしていました。けれど、公開授業の授業者を担当するときは数カ月前から憂鬱でした。何度も実践していて自信のある授業は、うまくできても「新しさが無い」と批判され、なんとか提案性のある授業をしてみると、今度は容赦ない質問攻めに合うのです。必死で答える私ののはカラカラになり、頭の中はオーバーヒート……。

でも今なら、先生方からいただいた手厳しい言葉が、授業を確かなものにするための心からのアドバイスだったと理解できます。公開授業は、一つの授業を多数の先生が見ます。協議会では、それぞれの先生がそれぞれの視点で見いだした課題について発言し、共有します。そうやって多角的な意見を集め、授業を見直し、授業を研究することが醍醐味なのです。

前おきが長くなりましたが、本書は「授業研究」をみなさんにもっと広めたいという思いから企画しました。

授業づくりは難しい、という声を聞くことがあります。

日々悩み努力を重ね、目の前の子どもたちと向き合い、授業づくりに取り組んでいらっしゃる全国の先生方に、ぜひ「授業研究」をおすすめしたいのです。

研究というと何か難しいことをするのかと思われるかもしれませんが、そんなことはありません。気軽な気持ちで、ページをめくってみてください。



冒頭の質問に先生たちが口をそろえて「ワクワク！」と答えてほしい。

授業中の子どもたちに「ワクワク！」してほしい。そういう思いで本書を編成しました。

もくじ

Chapter 1 ・ 授業研究しよう 4

Chapter 2 ● 授業をかんがえる 8

題材のきっかけ
題材のアレンジ
空間づくりを考える
シミュレーションする

Chapter 3 ▼ 授業をおこなう 16

子どもが動きだす導入
授業は変容する
声かけは細やかに
授業をとじる

Chapter 4 ● 授業のみかた 24

授業を見る視点
授業記録をとろう
作品から読み解く

Chapter 5 🌱 授業のひろがり 32

認め合うクラスへ
個に寄り添う支援
地域とつながる

Chapter 6 ・ わたしの授業 38

授業実践① まぼろしの花
授業実践② 雨の日の学校で

あとがき 46

本書の構成

Chapter 1 授業研究しよう

授業とはそもそも何なのか、授業を改善するためにはどうすればいいのか、についてお話しします。最初に読んでいただくと、Chapter2以降のお話をより楽しんでいただけたと思います。

Chapter 2 授業をかんがえる

授業をする前、授業を準備するときのお話です。「今度の図工、なにしよう……」と悩まれている先生に。

Chapter 3 授業をおこなう

授業当日、授業を進めていくときのポイントについて触れています。「どんなに準備しても、当日なかなかうまくいかない……」という先生に。

Chapter 4 授業のみかた

授業を見るとき視点点がギュッと凝縮されています。「他の先生の授業を見て、ヒントを得たい!」という先生に。

Chapter 5 授業のひろがり

ちょっぴり視野を広げて、「図工の授業」がもつ力をとらえ直してみます。「授業の枠をもう一步広げて、子どもの学びを深めたい」という先生に。

Chapter 6 わたしの授業

二人の先生の授業実践を紹介します。授業に込められた子どもたちへの思いをぜひ感じてください。最後にお読みいただくと、各Chapterの視点点が授業の中にちりばめられていることが分かるはずです。

本書は、全国津々浦々 15 人の先生に各ページをご執筆いただきました。本書を読めば、16 人分（西村を含む）の授業の視点を得ることが出来ます。いわば、「誌上公開授業」です。さあ、ページをめくって、授業研究を始めましょう！

by 西村

Chapter 1 授業研究しよう



授業ってなに?!

授業の真ん中に、
子どもへのメッセージ

授業に欠かせないものって何でしょう？ 私は、教師から子どもたちへのメッセージだと考えています。メッセージというのは、「こんなふうに育ってほしい」「こんな見方や考え方を身につけてほしい」「こんなことに気づいてほしい」という教師の願いです。このメッセージを子どもたちに届けることが、授業の中核にあると思うのです。

ただ、「〇〇に気づいてね」「〇〇という考え方もあるよ」といくら言葉で伝えても、子どもたちが実感をもって理解できるとは限りません。ですから、メッセージを「授業」という形に落とし込んで、子どもたちに手渡すのです。教師が「こんなことやってみない?」と提案することから始まり、子どもたち自身が活動を通して学び、いつのまにか先生の願いにたどり着いている——それが理想的な授業の姿です。

授業のあり方は教科によって異なります。図工でいえば、造形活動(＝形や

色、材料などに関わりながら、つくったり表したりすること)を通して学びます。つまり、図工の授業とは、「教師から子どもへのメッセージを、造形活動に落とし込んだもの」なのです。

授業は、「こいつやっこ考える」

では、「メッセージを造形活動に落とし込む」すなわち「授業を考える」にはどうすればよいのでしょうか。アプローチの仕方はいろいろあります。

ちょっと私の授業を例に挙げてみましょう。五年生で「オモテとウラ」という授業をしたことがあります。小学校には表門と裏門がありますが、中には裏門から通う子どももいます。「他の人には『裏門』でも、その子にとっては『表門』なんだな」とぼんやり考えていたとき、「人によっていろいろな見方がある」というメッセージを込めた授業をしよう」と思いついたのです。

この授業では、誰かが決めた表裏ではなくて、「ここから、ここのように見たら表」という基準を自分が決めることを経験してほしいと思いました。「どちらが表で、どちらが裏か」という問いが

子どもの中に生まれるにはどうしたらよいかを考え、いろいろな角度から作品を見られるほうがよいと思い、立体に表すことにしました。

また、活動の過程で「つくる」「眺める」「つくりかえる」を繰り返していくだろうから、材料は可塑性のある粘土にしよう——というように、具体的な部分を肉づけしていきました。

授業を考えるための入り口はいろいろあります。届けたいメッセージが真っ先に頭に浮かぶこともあれば、「今日は画用紙しかないけど、何ができるだろう」から始まって伝えたいメッセージに結びつけることがあってもかまいません。大切なのは、活動の内容がメッセージに結びついているか、なのです。

授業は、「子どもとこいつやっこ」
のしくみ

メッセージを届けたい相手は言うまでもなく、目の前の子どもたちです。このことが抜け落ちてしまうと、教師が一方的に考えを押しつけるだけの授業になってしまいます。

私は、授業を考えるとときあえて「余白」

授業研究で授業改善

■ 授業研究のすすめ

授業は教師と子どもたちのやりとりで進んでいきますが、子どもの反応を完全に予測することはできません。授業はまさにライブです。どんなに念入りに計画を立てても、思い通りにいかないこともあります。

ちなみに、先ほどの「オモテとウラ」は公開授業で実践したのですが、子どもたちが「見る基準」を定めるのが難しくかった様子で、課題が残るものでした（授業後、ベテランの先生方から手厳しいお言葉をたくさんいただきました……汗）。

私は、教師の授業力には三つの側面があると考えています。第一に、授業を計画できること。第二に、計画通りに授業を進められること。そして第三に、当日の子どもへの反応を見ながら、柔軟に対応できることです。私が「オモテとウラ」の授業をしたとき、もっと子どもたちの様子をよく見て、分析し、軌道修正して立て直す第三の力があれば、子どもたちもしっかりとメッセージを届けられたはず。この第三の力を鍛えていかなければ、

れば、授業をよりよいものに改善していくことは難しいでしょう。

では、どのように授業力を鍛えればよいのでしょうか。そこで私がおすすめしたいのが、本書のテーマである「授業研究」なのです。

■ 授業研究とは

「授業研究」という言葉を初めて聞く方もいると思います。授業研究とは、言葉のとおり「授業を研究すること」です。「授業を研究すること」で、自らの授業を改善することができます。

授業研究には、大きく二つの側面があると私は考えています。

一つは、「授業を構成する様々な要素について研究すること」です。授業は、実にたくさん要素（図工であれば、材料・用具、場の設定、題材の提案、声かけなど）が組み合わさり、影響し合っていてできています。知っている要素の数が多くほど、授業を考えるときの視点が増え、授業の全体構造がどのようになっているのかを考えられるようになります。

二つ目は、「子どもを研究すること」です。すなわち「子ども理解を深めること」で

す。いくら授業の構成要素を知っていても、子ども理解が不足していれば、授業は改善できません。子どもを知るには、子どもをよく見て、子どもと対話することです。これまでどんな経験をし、どんなことに興味を持ち、どんなことを感じ、考えているのか——子どもに寄り添い、授業中の子どもはもちろん、学校生活の中での子どものをよく観察してみましょう。

■ 授業研究の方法

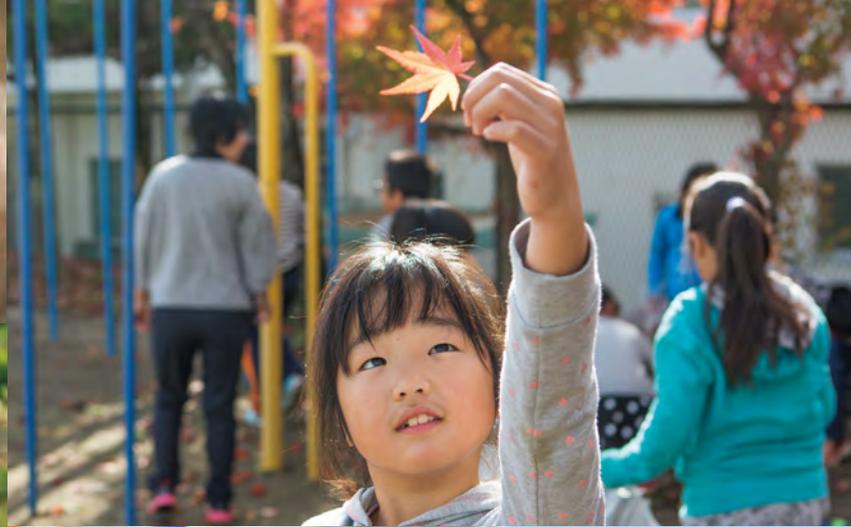
では、授業研究はどのように行えばよいのでしょうか。学習指導要領を読み込んだり、教育や教科に関する書籍を読んだりする方法もちろん有効ですが、本書で私が特におすすめしたいのは、「他の先生の授業を見ること」「他の先生と話すこと」です。自分が今もっている力だけでは、授業を考える新しい視点を得るのは難しいです。ですから、先輩の先生、同僚の先生、大学時代の恩師や同期生など、身の回りにいる他の先生の力をどんどん借りましょう。「今度の授業、どうしようか迷って……」と気軽に相談してみると、思わぬ視点からアドバイスをもたらせるかもしれません。

日本の教育現場では、全国各地の学校で教師が互いの授業を見合う機会を設け、授業力の研鑽が行われてきました（実はこんな熱心に行っているのは日本だけです）。授業を見ることで、授業者の発問や声かけといった手立てを参考にできるのはもちろん、子どもが授業者のなげかけに対しどんな反応をし、どのように活動が展開していくのか、客観的に見ることができます。「ある先生と子どもたちとの関わり方」を見ることは、そのまま写し鏡となつて、「自分と子どもたちとの関わり方」を見直す機会になります。

授業後の協議会にもぜひ参加してみてくださいと思います。いっしょに授業を見ていた他の先生方が、どのような視点で授業を見ていたのか知ることができそうです。自分の「授業を見る視点」として持ち帰りましょう。

他の先生がもっている「視点」をどんどん盗みましましょう。視点が增えれば、授業が楽しくおもしろいものになっていきます。そして、目の前の子どもたちといっしょに、その場そのときにしか生まれえない「図工の時間」を楽しみましょう！





Chapter 2

授業をかんがえる

題材、場の設定、実演練習など、授業前に考える様々なこと。本章では、準備中の先生をのぞいてみましょう。

1 題材のきっかけ

渡邊 裕樹（東京都つじが丘小学校）

休み時間の子どもを観察しよう

子どもたちが学校生活の中で一番好きな時間は、いつだか知っていますか？「図工の時間」と言いたいところですが、残念ながら「休み時間」なのだそうです。休み時間といっても、のんびり寝転がって本当に休んでいる子どもはいまぜんよね。休み時間の方が、子どもたちは遥かにエネルギーに、アクティブに過ごしています。国語の時間よりもたくさんのお話を話し、体育の時間よりもたくさん体を動かし、図工の時間よりも想像力を働かせている、なんてことも少なくありません。ある日の休み時間、池に葉っぱを浮か



べている四年生の子どもたちがいました。そのうちに、花びらも見つけて浮かべ始めました。最初は息を吹きかけて浮かそうとしていましたが、途中から木の枝を使って水に動きをつくり、流れていく様子や回転する様子を楽しんでいました。

二年生の教室をのぞいてみると、二人の男の子が、自分たちの筆箱や教室にある本などを、机の上に重ねたり傾けたりしていました。そのうちに、近くにいた男の子が机をつなげて加わり、なかなか立派なすべり台をつくらせて鉛筆や消しゴムを転がし始めました。どこまで転がるかと勝ちだとか、赤鉛筆だったらどうだとか言って、自分たちでルールを考えていました。

休み時間のもたらす自由で主体的な子どもの「遊び」の中に、私たちが授業をつくらせたり考えたりするためのヒントがたくさん隠れています。

遊びから題材へ

子どもの何気ない遊びを授業に取り入れていくことは、教師にとって大きな醍醐味といえます。

私の場合、前述の遊びをヒントに、四年生で「色と形のプール」という授業を考えました。大きなバットやタライにためた水に、自分たちで形や色を集めて、浮かべたり動かしたりして、流れや感じの変化を味わう題材です。子どもたちは、底に映った影を見つたり、ためた水の色をつけたりして、次々に新しいアイデアを思いついていました。また、二年生では、紙筒などを使って転がるキャラクターをつくり、キャラクターが楽しく遊べるすべり台をつくる「ころころパチン！」という授業をしました。ジャンプ台をつくらせたり、転がる先に障害物や、落とし穴をつくらせたりして、友だちと関わりながら活動の幅を自分たちでどんどん広げていっていました。

子どもの力を借りて

私たちは、授業を通して子どもたちの資質・能力を育みます。しかし、日頃の遊びの姿からも分かるように、子どもたちはすでに「見る」「触る」「思いつく」「考える」などの多様な力を自然に働かせています。



そんな子どもたちの力をどんどん借りて授業づくりができれば、授業は子どもたちのものになるはずです。その手がかりを得るために、私は「休み時間の子どもたち」に会いに行くことから始めています。

2 題材のアレンジ

八嶋 孝幸（青森県朝陽小学校）

既存の題材、
「そのまま」で大丈夫？

「これ、おもしろそう」「これ、やってみたい」。新しい教科書を開いたときに、口々に期待の声を上げる子どもたち。教科書や実践事例集などには魅力的な題材がたくさん掲載されています。それもそのはず、掲載されている題材は、全国の先生方が子どもたちと積み上げてきたすばらしい実践がもとになっています。しかし、違う見方をすると、掲載されている題材は、ある先生が目の子どもの実践の成果であり、「自分の目の前の」子どもたちの実態に必ずしも合っているとは限りません。教科書などを優れた資料として生かしながら、子どもの実態に合わせてアレンジをすることで、自分と目の前の子どもたちならではの授業をすることができそうです。

子どもの声を聴けよ

「前にやったやり方を生かしたら、こんなものができたよ」「あの材料と用具があればいいな」「〇〇さんの表し方がステキだな」「偶然できた形から、おもしろいことを思いついたよ」――授業の中で、子どもたちが活動を振り返っているいろいろなお話をしてくれました。子どもたちのお話を聞くと、「そんなことを考えながらつくっていたんだ」「そんな心の動きがあったんだ」「こんな力があったと感じていたんだ」など、多くの発見があります。目の前にいる子どもたちのことを一番知っている先生として、子どもたちのたくさんのお話を受け止め生かそうとすることも大切です。

スタートはいつも「ねんこ」から

子どもは未来を築く存在です。それぞれの個性や感性を尊重しながら、子どもたちが自らの資質・能力を発揮し、伸ばしていけるようにしたいものです。そのため、子どもたちといっしょにどんなことができるのかを考え続けたいと思っています。



題材をアレンジするときのポイント

1 アレンジする前に……

子どもの背景を理解する。



資質・能力の観点から考える。

- 今、身につけている資質・能力は何か？
- これから、伸ばしたい資質・能力は何か？

2 子どもの実態に合わせて、題材をアレンジする。

子どもの興味を生かして

「どんだんらべて」*1

身の回りにある材料を並べることを楽しむ、造形遊びをする題材。



「秋になって、イチヨウの葉やまつぼっくりを見せに来た子がいたな。校庭にある自然材を使った活動をしたら、もっとたくさんの形や色を見つけられるかも」

他教科の活動と関連づけて

「ねん土マイタウン」*2

粘土を使って自分の住みたい想像の町をつくる、立体に表す題材。



「この前社会科で町探検に行ったから、そのとき見た建物や風景を思いだすことをきっかけにしたらイメージが広がるかも」

身につけてほしい資質・能力に焦点化して

「えのくでゆめもよう」*3

絵の具と用具を使っていろいろな表し方をためす、絵に表す題材。



「どの用具を使うか、どのように使うかによって、様々な表し方ができることに気づいてほしいな。小さめの紙を多めに用意して、ためす時間を十分に設定しておこう」

*1 平成 27(2015)年度版 小学校図画工作科教科書 1・2 上 P40-41
*2 平成 27(2015)年度版 小学校図画工作科教科書 3・4 上 P46-47
*3 平成 27(2015)年度版 小学校図画工作科教科書 3・4 下 P8-9

3 空間づくりを考える

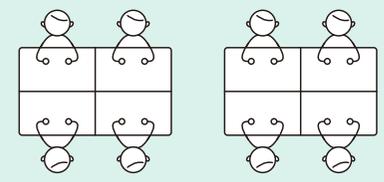
濱崎 昇平（鹿児島大学教育学部附属小学校）

表現・鑑賞が一体となった空間

授業の空間を考える際には、どのような資質・能力を育むことをねらいとしているのかを明確にした上で、場の設定を工夫することが大切です。図工では、子どもが表現と鑑賞を行き来しながら活動できるようにすることで、資質・能力を豊かに育むことができます。そのため、友だちの表現のよさを見つけ、自分の表現に生かしたくなるような空間づくりが大切です。どうすれば表現と鑑賞が行き来し、学び合いが生まれるような空間にできるのでしょうか。

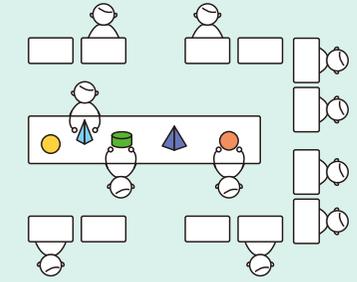
机の配置を工夫する

机の配置ひとつで子どもの活動は大きく変わります。机の配置が授業のねらいを達成できるかどうかの鍵を握っているといえます。活動のねらいや内容に応じて、隊形や場づくりを設定することが大切です。



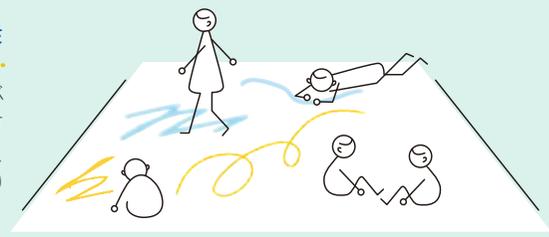
自然な鑑賞活動を促したいとき

二～四人を向かい合わせる隊形が効果的です。子どもは活動しながら目の前にいる友だちの表現に目がいきます。「見てごらん」と言わなくても、必要に応じて鑑賞を行い、表現に生かすことができます。



友だちの作品の鑑賞を促したいとき

全員を向かい合わせる隊形が効果的です。それぞれが折り紙でつくった建物などを集めて町を表現するような題材では、長机を用意して作品を並べられるようにするとよいでしょう。友だちの作品にも自然に目がいき、自分の表現に生かすことができます。



全身を自由に使って活動させたいとき

机の上だけが表現の場所とは限りません。机をすべて廊下に出し、教室の床に大きな紙を敷き、表現する場の設定もあります。子どもたちは全身を使い、友だちと交流しながら表現したり、自由に歩き回りながら友だちの表現を鑑賞したりできます。

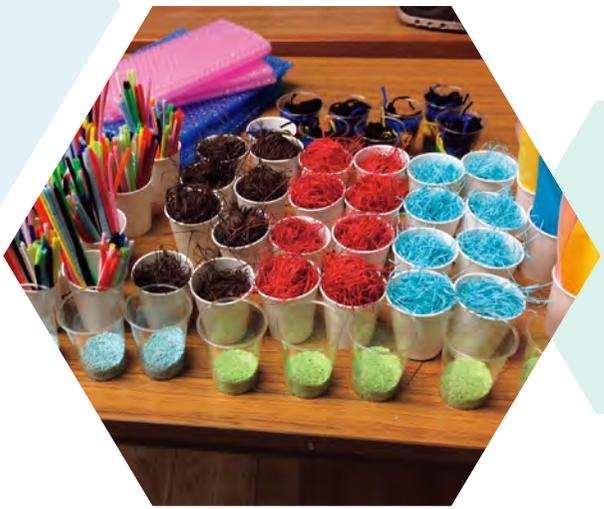
板書を工夫する

私は板書をするとき、「導入で子どもが感じたことや思い」「本時のめあて」「活動の流れ」「イメージ」「技能」「造形的な視点」「振り返り」などを意識して書くようにしています。子どもの思いや学びを可視化することで、子どもたちが自分でポイントを確認しながら活動したり、次時への見通しをもてるように心がけています。

また、工作の題材などで、子どもたち同士の学び合いから技能を獲得できるように促したい場合は、黒板に「名人コーナー」と「困ったコーナー」を用意しておくのが効果的です。子どもたちは、自分の作品の見てほしいところや困っているところを自由に書き込みます。こうすることで、自分の気づきを友だちに伝えたり、困っていることを友だちに相談したりと、子どもたちの中で自然な学び合いが生まれます。それぞれのコーナーには、つまずきそうな観点を教師が事前に想定し書いておくことで、子どもたちが記入しやすくなります。

材料コーナーを工夫する

子どもの豊かな表現を支えるのが材料コーナーです。様々な材質に気づかせたい場合は、石や紙、毛糸など材質の異なる材料を用意するとよいでしょう。また、材料コーナーを教室の中央に設置することで、材料を取りに行くときや材料を選ぶときに自然と友だちの活動や作品に目がいきます。鑑賞したことを生かして材料を選んだり、新しいアイデアを思いつくことに結びつきます。



導入の仕方、活動中の声かけや軌道修正、振り返り……。本章では、授業中の先生の動きを追ってみたい。

1 子どもが動きだす導入

日高 大介（埼玉県上荻原小学校）

「やってみたい！」を引きだす

導入では、まず、子どもの「楽しそう」「やってみたい！」という意欲を引きだすことが大切です。教師が、実際に材料を手で持って見せたり、仕組みを動かして見せたりすることで、子どもはその後の活動を具体的に思いえがくことができます。

導入の際に注意しなければならないのは、教師が例示する表し方やつくり方が、子どもにとって「必ず守らなければならない」「一方的な指示」にならないようにすることです。そのためには、「何を、どこまで示すのか」をよく考える必要があります。例えば、「用具と絵の具を使っていろいろな表し方をためす」という題材の場合、



使う用具とそれぞれの使い方については最初に伝えます。そのあと、どの用具をどのように使うか、絵の具の色や形からどのようなイメージをもつかは、子ども一人一人に委ねます。題材のめあてに立ち返り、「最初に伝えるべきこと」「子どもに任せること」のポスターラインを先生がしっかりと認識しておくことが大切です。

イメージを膨らませる手助け

子どものイメージを膨らませるための手立ては様々です。触覚を大切にする題材なのか、想像したことから表す題材なのかといった活動のねらいによって適した手立ては変わってきます。

ここでは、「言葉」をもとに子どもがイメージを膨らませる方法について紹介します。このとき活躍するのが板書です。まず、教師の声かけや題材名から思い浮かべたイメージを聞きだします。子どもから出てきた言葉は、板書してクラス全体で共有します。その際、形や色に関するキーワードを観点ごとに整理して書くことで、イメージを膨らませるヒントになります。友だちが思い浮かべたイメージを知ること、自分だったら……と

考えるきっかけになります。子どもの言葉を受け止め、言葉をつなぎ、イメージを膨らませる手助けをするのが、教師の役割です。発言していない子どもも自分の頭の中で想像をめぐらせています。イメージすること、想像することは、子どもが今まさに「自分にとっての新しい意味や価値をつくりだしている」瞬間なのです。

「後出し」ゼンゴ！

活動が始まってから指示をする「後出し」指示は、子どもの意欲をそいでしまいます。「後出し」しないためには、導入の段階で本時のめあてを子どもたちとしっかりと共有することが大切です。めあてを明確にすることは、適切な評価をすることにもつながります。また、使う用具の指示や安全指導などは最初に漏れなく伝えておくことも重要です。

活動が始まったあとのフォローも大切です。めあてに沿いながら自分の思いをもって活動している子どもを紹介したり、めあてからそれた活動をしている子どもがいれば、いっしょにめあての確認をして方向性を修正することも大切です。

導入のポイント

- 意欲を引きだす
 - 実物（材料、用具、動く仕組み、参考作品など）を見せる。
 - 「何を、どこまで示すか」に注意する。
- イメージが膨らむように
 - 題材のねらいにあった手立てを選ぶ。
 - 子どもの発言を板書するときは、観点ごとに整理して書く。
- 「後出し」はしない
 - 本時のめあてを子どもと共有する。
 - 使用する用具や安全指導などの指示は漏れなく伝える。
 - 子どもがめあてに沿って活動できているか確認する。

2 授業は変容する

中島 綾子（東京都 赤土小学校）

子どもは教師の想定を超えていく

授業が子どもとの関わりによって変わっていく——これまでの授業を思い返してみると、そうした場面がたくさんありました。例えばいくつかの図工の時間、ペットボトルで車をつくる題材で、一人の子どもが車体に色水を入れることを思いつきました。私は工作的な活動をイメージしていたのでペットボトルを容器として生かすことは想定していなかったのですが、その子がつくった車はとても素敵なものになり、他の子どもたちにも大ヒットしました（しかも何も入れていない状態よりよく進む気がしました）。このように、子どもたちが目の前で活動しているからこそ、机上では気づけないことにハッとさせられ、よりよい授業をつくることができると感じています。

子どもに合わせて展開を変える

あるとき、子どもの反応を見て導入をやり直したこともありました。六年生で、

にある何かに気づくきっかけになることや、表したものを見てまた考え、色や形などを重ねたり変化させていくことで、自分の心が少しずつ画面に表れていくことを話しました。

そうすると子どもたちは安心した様子で、じっくり考えながら自分の表したいことをさらに追求していききました。

心の「揺れ」をキャッチする

授業は変容していくものです。子どもは、教師の提示した方向とは異なる材料の魅力を見つけるなど、思いもよらない反応をすることがあります。そういう子どもの生の姿をキャッチして、子どもにとってよりよい時間につくりかえていく柔軟さをもつことが大切だと思います。

子どもは、「今」目の前で起こっていることをおもしろがっています。何かを感じ考えています。私は、どんな授業でも、作品として着地する以前の「今」を一人一人が豊かに体験できるように図工の時間を目指しています。そのためにも、子どもと同じ目線に立って、つくりだす過程にある、その子の心の揺れのようなものにいつも敏感でいたいのです。



「気持ち・心」をテーマに絵に表す授業をしたときのことです。透明なアクリル板の上に、木工用接着剤を混ぜた絵の具を使って表す活動でした。この絵の具はとろとろした感触がおもしろい材料です。木工用接着剤を混ぜたのは、「気持ち・心」を「うれしい」「悲しい」といった概念化された記号のようにとらえるのではなく、絵の具と関わることに没頭しながら、自分のえがいたものに自然に表れてくる内面的な「気持ち・心」を感じとってほしかったからです。

初めて使う材料なので、第一次では絵の具をつくったあと「ためしなぐらいいろいろいじくってみよう」と提案しました。様々な表し方をためししながら、絵の具の変化をじっと見つめる様子が見られました。

しかし、第二次で「気持ち・心」というテーマを改めて提示すると、予告はしていたものの、子どもたちは困ってしまいました。自分の内面と絵の具の色や形とがどうつながっていくのかが分からなかったのだと思います。

そこで、第三次は第二次までの作品を鑑賞することから始めました。自分が何気なく選んだ色や行為が、自分の心の中



3 声かけは細やかに

矢澤 聡 (沖縄カトリック小学校)

効果的な声かけとは

練りに練った導入をした授業であっても(場合によっては練りに練った導入の場合ほど)、その後の活動が教師の思った通りに進むとは限りません。満面の笑顔で「見て見て!」と駆け寄ってくる子どもばかりならよいですが、実際の授業では、じっと考え込んだ様子で手が動かない子どもや、友だちのやり方を横目で見ながら見様見真似でやってみる子ども、ねらいを理解できずに全く違う活動になっている子どもなど、その反応は様々です。このような場面に遭遇したとき、私たちは子ども一人一人にどんな声かけをすればよいのでしょうか?

例えば、「先生! 見て見て!」と最初は積極的に活動を見せに来ていた子どもが、活動が進むにつれて、気がついたら全く来てくれなくなっていた、という経験はありませんか? 子どもは、自分ができたことや見つけたことを先生に知ってほしい、認めてほしいという思いで活動や作品を見せに来ます。「いい



子どもの思いに寄り添って

ね!」と言ってあげることは確かに大切なことですが、単に「いいね!」と語りばかりでは、意欲が増さないばかりか活動がねらいから離れていくことになりかねません。

子どもの活動が中心である図工の授業において、声かけは先生が授業の中でできる直接的で重要な手立てといえます。効果的な声かけをするためには、子どもの活動をしっかり把握した上で、絶妙なタイミングを見極め、その子のくふうや発見、変化などを具体的に認めてあげることが大切です。そうすることで、子どもの活動の転換や発展を促すことができます。

授業中、子どもがどんな思いをもって活動しているのかは、見ただけでは分からないことがたくさんあります。声かけで一番重要なことは、子どもがどんなことを考えて活動しているのかを教師がかんでおくことです。

うまくいっていれば、その部分を具体的に認めてあげることが必要ですし、授業のねらいから離れているのであれば、子どもがいったん立ち止まって、今日のみえあてが何であったかを確認できる機会をつくる必要があります。そのためにもまず、子どもの言葉に耳を傾けてみま

しょう。一見教師からは判断がつかないようなことも、子どものつぶやきに耳を傾けたり、実際に対話したりすることで、そこに込められた子どもの思いに気づくことができるでしょう。

また、その日のめあてに合わせて、「どんな発見があったかな?」「思いついたくふうを教えてね!」など具体的な言葉を投げかけていくことが大切です。なぜなら、そのような具体的な「声かけ」が、子どもにとって今行っている活動を整理し、自分自身で価値づけしていく力を育てることにつながるからです。

声かけの種類

子どもの状況に合わせて、適切な声かけをしましょう。

活動がめあてに沿って順調に進んでいる子どもには

「認める」
声かけ

活動を具体的に認めるように心がけよう。

活動がめあてからそれている子どもには

「確認」の
声かけ

否定的にならず自分で気づくように声かけしよう。

活動が停滞している子どもには

「促す」
声かけ

状況や子どもの性格などにより、適した声かけは異なります。いくつか方法を提示してあげよう。

全体へ声かけをするときには

「広める」
声かけ

子どもが見つけたくふうや疑問を共有したいときに行おう。くふうを見つけた子どもへの意欲づけにも効果あり。

4 授業をよこごね

佐藤 潤子(群馬県三郷小学校)

学びは連続しつづいて

楽しく取り組む子どもたちの姿にたくさん出会い、授業を終える。ほっと一息。教師としての充実感を味わうひとときです。でも、それだけでよいのでしょうか。授業の終わりは、今日の学びを次の授業や生活へとつなぐ大切な場面です。ここでは、題材「光のハーモニー」を例に挙げて、「一回の授業をとじる」場面と「一つの題材をとじる」場面の役割について考えてみましょう。

「一回の授業」をよこごね

「光のハーモニー」は、光を通す身近なものや、マジックペンで色をつけた透明容器に、光を当てて投影される形や色を楽しむ題材です。

第一回の授業では、色をつけた透明容器にプロジェクターの光を当て、スクリーンに映しながら楽しむ活動を行いました。個々の活動に十分にやり組んだあと、さて、授業をとじる場面です。



「一つの題材」をよこごね

「光のハーモニー」の終末の場面では、光の効果を考えて表した作品を校庭に並べて美しい場を構成し、できあがった空間を鑑賞しました。

校庭に映しだされた光の美しさに満足する子どもたちに、「こんなふうな光が美しいと思ったことがあるかな」と尋ねました。すると、「ステンドグラスを見ることがあるよ。太陽の光が当たってきれいだった」「水槽の中にビー玉を入れるとキラキラしてきれいだった」という「反応。過去の経験と学習したことが結びつき、学びと生活がつながった瞬間です。

「これからも光がつくりだす素敵なことを見つけていこうね」となげかけて題材をとじました。

それから数日後のことです。窓際に置いたピンクのガラスの花瓶に光が差し、机に美しい模様が映しだされていました。「見て！ ピンクが映ってきれい」と、うれしそうに友だちに教える子どもがいました。授業後も学びが生きている姿に、じっくりしてしまいました。

一つの題材をとじるときは、その題材での学びを視点にして日常生活を新鮮な目でとらえ直したり、生活を豊かにする美術の働きに気づいたりできるように促してみましょう。

今まで活動に没頭していたので、少し離れた目線で自分や友だちのつくったものを鑑賞する場を設けました。「こんなふうができたのか」「私のと似てる」「光が強いともっときれいになるよ」などと子どもたちの声が聞こえてきました。自分や友だちの表現を土台に、表現を発展させることに意欲をもつとともに、次回の活動への期待が膨らみ始めました。「よし、次は外に出て太陽の光でためしてみよう」と提案すると「やってみたい！」と弾んだ声が返ってきました。

一回の授業をとじるときは、次の活動への期待を高め、表現の発展につなげることが大切です。





Chapter

4

授業のみかた

授業を見る視点、記録のとり方、子どもの作品の見方……。本章では、授業を「見る」ポイントを探ります。

1 授業を見る視点

服部 真也（奈良女子大学附属小学校）

授業を見に行こう

「授業は、どこをどのように見ればいいですか」と聞かれることがあります。私は、「自分の授業改善につながるチャンスだから、自分の課題に照らし合わせて、視点を定めて授業を見るといいよ」と答えます。単なる題材のネタ探しや小手先の指導方法を真似るだけで終わってしまうのはもったいないことです。「この題材はどんな資質・能力を育むために設定されたのか」「授業者はどのように指導や支援をしているか」「子どもはどのように思考し表現しているか」など、視点を定めて見ることが授業の見え方が大きく変わってきます。

授業者の意図を読み取る

授業者は、子どもたちにどのような資質・能力を育もうとしているのでしょうか。それは、どうしたら感じとれるのでしょうか。指導案を読むと、授業者の意図の大枠を読みとることができ、具体的な指導方法などは授業そのものから学ぶしかありません。

「先生は子どもたちとどのように関わっているだろう」「どのような姿勢で、どの向きから、どのタイミングで何を話しているだろう」「何を意図して板書を作成しているだろう」「材料や用具をどこに置いてあるだろう」。その先生の息づかいやたたずまい、子どもとつくる場の雰囲気などから指導の意図を探ってみましょう。

「どこから見るか」も考えよう

どこから見るかによって、見えてくるものが変わってきます。教室の後ろに立てば、場全体の雰囲気や授業者の発問、板書が見えてきます。教室の前に立てば、先生の発問に対する子どものリアクションや活動への意欲が見えてきます。子ども

ものそばにしゃがんでみれば、その子の目線や体の使い方などの細部が見えてきます。

子どものそばで授業を見るのが私のおすすめです。子どもの目線や表情、手つきや動き、表現したものととの距離など、様々なところから子どもの思考を感じることがができます。例えば、前に乗りだすようにして腕全体で粘土に穴をあけようとしている子どもの、手全体に込めた力の具合、高く上がった肘、粘土にくっつきそうになるくらい近づいた顔……。子どもに近づきよく観察することで、教室全体を漫然と見ているだけでは分らなかった、子どもが感じていること、考えていることを知ることができます。

いつも教室の後ろで立ったまま見ているという方は、ぜひ一度子どものそばにしゃがんでみてください。子どもの前に回り込んで、目線を追いかけてみましょう。子どもに近づいて息づかいを感じてみましょう。子どもといっしょになって座りこんでみましょう。

授業、どこから見る？

教室の前から

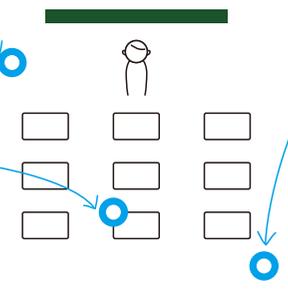
●発問に対する子どもの反応や意欲が見える。
＝「授業をする」授業者側の目線

子どものそばにしゃがんで

●子どもの目線や動きなどの細部が見える。
＝子どもの思考に寄り添う目線

教室の後ろから

●全体の雰囲気、授業者の発問や板書などが見える。
＝「授業を受ける」子ども側の目線



指導案を確認しよう

本時のねらいを確認しておく、授業を見る視点の一つになる。

図画工作科学習指導案

平成〇年〇月〇日 〇校時
〇〇〇〇小学校

題材名
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

題材の目標

児童の実態

評価規準

| | | | |
|---|---|---|---|
| / | / | / | / |
|---|---|---|---|

全体計画

第一次 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

第二次 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

材料・用具

本時の展開

(1) 本時のねらい 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

(2) 本時の展開 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

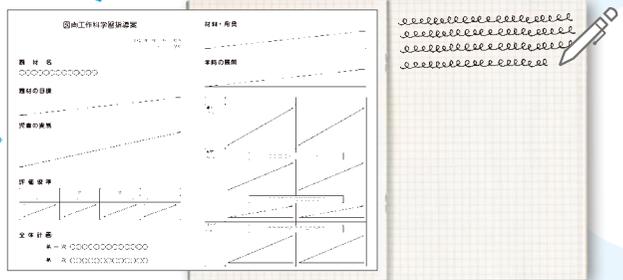
| | | |
|-----------|--------------|--------------|
| 導入 10分 | 〇〇〇〇〇〇 | 〇〇〇〇〇〇 |
| 展開 45分 | 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 | 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 |
| | 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 | 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 |
| | 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 | 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 |
| まとめ 5分 | 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 | 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 |

本時のねらいを確認しておく、授業を見る視点の一つになる。

左側には、題材の目標や評価規準、全体計画など題材全体に関わる内容が書かれている。事前情報として確認しておこう。

当日の授業展開が書かれている。指導上の留意点もチェックし、授業者がどんな手立てを想定しているのか見てみよう。

指導案はノートに貼って保管するとよい。ノートを使うと、広いスペースを使ってメモをとることができ、記録がたまっていくのであとで見返しやすい。



② 授業記録をとろう

森貫 祐里 (北海道 大倉小学校)

活動の変化をたどる、記録をとる

ある授業でのお話です。Aさんは、なかなか粘土を触りませんでした。しばらくして、ようやく粘土をボールのように丸め始め、のし棒で伸ばしていききました。すると、友達から「丸めたら立ちそうだね」と声をかけられました。これをきっかけにAさんの活動は活発になり、筒状にした粘土を削ってはつけ足しを繰り返していききました。授業の終わりには、「タワーになったよ!」と自分の作品を誇らしげに紹介していました。

一時間の授業の中で、子どもの活動は常に変化していきます。変わったきっかけは何だったのか、それぞれの活動にどんな価値があったのかについて考えるには、授業記録をとることが役立ちます。また、授業記録をとることで、指導している先生が子どもの活動をどのようにとらえ声をかけているのかを知ることができます。授業を記録していくと、自分が授業で見たかったところ、自分の改善したいところが見つかることができます。

ノーリッジな記録をとる

研究授業などでは授業者の指導案が配布されることが多いと思います。授業が始まるまでに、指導案にしっかりと目を通しておくことで、授業の見え方が変わってきます。指導案には、本時のねらいや手立てなどが書いてあるので、ねらいに向かって子どもたちが活動できているか、確認しながら授業を見ることができ

ます。授業記録をつけるときは、指導案の横にメモするだけでなく、ノートを用意して記録をためておき、いつでも振り返れるようにしましょう(指導案のコピーをあとで貼っておくと更によいと思います)。とはいうものの、最初はどのように記録をつければよいのか分からないですよね。28、29ページでは二つの方法を紹介しています。色々な方法をためし、自分に合った記録方法を見つけ、授業研究に役立てましょう。

授業記録のおたすけアイテム



2色ボールペン
記録をとるときは、複数の色を使い分けると分かりやすいです。
●先生/子ども
●指示/評価
●つぶやきや会話/活動
など、ルールを決めて二色くらいで使い分けるとよいでしょう(色分けしすぎると、あとで混乱してしまうので注意)。



カメラ
子どもの活動は、友だちや先生との関わりだけでなく、材料を置く場所や置き方、板書、掲示物、机の配置といった場の設定に支えられています。真似したいな!と思ったら、許可を得て写真を撮りましょう。授業中は子どもたちの肖像権などに十分な配慮が必要ですが、授業前、協議のあとなどは撮影の許可が得やすいです。写真がNGの場合は、簡単なイラストで記録するのもよいでしょう。



プロセス探偵になろう

えがかれたモチーフや、絵の具の色の重なり、描画材のタッチなどを頼りに、描画の過程をじっくり読み解く「プロセス探偵」になりきってみると、活動中の子どもの体の動きや視線の先が徐々に目の前に浮かんできます。「プロセス探偵」になると、子どもの思いに寄り添おうとしている自分に気づきます。形や色と創造活動のプロセスそのものにあります。ですから、活動のプロセスを読み解くことで、子どもの学びを読みとることができるとは思います。



「いろいろのしぜんとうみ」平成27(2015)年度版 小学校図画工作科教科書 1・2年下 P25 掲載

子どものお話をする

「いい感じだね！ ねえ、この絵のお話して」。作品を子どもといっしょに眺めながら、その子の心をのぞかせてもらうときの、私にとっておきの言葉です。子どもたちは、頬を緩めて一気に語りだします。私は、「へえ、そんなことがあったの。キラキラ光っていたんだね」と作品を指差しながら相づちをうちます。この時間が大好きです。

子どもの作品には、体で感じた色・音・気持ちの変化など、表したかったことがたっぷりつまっています。一枚の画用紙にえがきだされた心の中のイメージは、言葉だけでは表せない複雑なもので、時間を何層にも重ねた厚みをもっています。教師や親が自分なりの推理を引き出しとしてもおき、「ねえ、お話しして」と語りかければ、心と心はさらに近づくことでしょう。

推理結果

1. 「わあ、ピンクだ。使ってみよう」。とるところ絵の具のきれいなピンク色に目を奪われ、早速お気に入りのモチーフの花をかいいたのでしよう。画面にいくつもの花が引き立つようにえがかれています。
2. 花を守るように気を配りながら、海でしようか道でしようか、背景を青色で彩っています。二本の指の軌跡が動物の足跡になることを発見。青色とピンク色のコントラストの美しさにも気がつきました。指の向きや力の入れ方を変えながら、体をひねって楽しそうにえがいています。船から動物が降りてきました。花・海・船・雲。感じて、考えて、手を動かしていくうちに発想が広がり、それぞれのモチーフがつながって、お話づくりにへと豊かに発展しています。

以上が私の推理です。
みなさんは、どう推理しましたか？

3 作品から読み解く

島谷 あゆみ（広島大学附属東雲小学校）

二年生の子どもがかいた上の絵をじっくり見てください。この子がどんなことを表したかったのか、推理してみましよう。

Q 1.

小さな作家さんは、
どんなことを
思いながら
かき始めた
のでしょうか？

Q 2.

かきながら
どんなことに気がつき、
イメージが膨らんで
いったのでしょうか？

Question



Chapter 5 授業のひろがり

子ども、先生、クラス、学校、地域……。多様な人々をつなぐ図工の力は、授業の枠を越えて広がります。

1 認め合うクラスへ

山田 洋揮（愛知県種菜小学校）

材料との出会いで変わる子ども

ある日、真っ白な画用紙を目の前にして床に膝をつき、机の端に噛みついて大粒の涙を流している子どもがいました。この子は、特に絵に表す題材になると気持ちが悪く不安定になり、線一本、形一つかくと手が止まってしまいました。「絵には上手とか下手とかないんだよ」と声をかけていると、苦手に思う理由を少しづつ話してくれました。原因は、家で絵をかいているときにいつも兄にばかにされることでした。

この子が変わりを見せたのは、触覚を大切にしながら粘土の題材との出会いでした。初めは粘土を細長くすることができな

しました。

伝播する言葉の力

ある日、いつもは穏やかに過ごしている子どもが突然泣きだして「もうやりたくない」と言い始めました。表したい思いはあるのに指先が思い通りに動かない、という経験をたびたびしていたようでした。

この子に変化があったのは、紙を開く仕組みを使って思いついたことを表すという題材を行ったときでした。「爆弾が爆発すると魚が変わる」というアイデアを思いついたようで、赤色のパスを強くこすりつけてかいていました。強くこすりつけた赤色の感じと爆発する様子がぴったり合った、その子らしい発想のおもしろさがつまった作品になりました。

クラス全体に紹介すると、「力強い線だね」「爆弾から魚に変わるアイデアがいいね」といった声が他の子どもからも聞こえてきました。それ以来、その子に「アイデアの達人だね」と繰り返し声をかけ続け、学年が終わる頃には自分の作品を満足気に友だちに話す様子が見られるようになりました。

教師の励ましの言葉は、いつしか子どもたちも使うようになり、「アイデアがいいね」「楽しそう」「いっしょにやろう」というやりとりが増えていきました。普段の生活でも認め合う場面が見られるようになり、クラスが一体となる瞬間が次々に増えていったのです。

図工がクラスをつないでいく

図工だからできる、個を見つめる指導があります。個を大切にして授業を進めると、クラスが一体になる瞬間を時折感じられるようになります。友だちの行為や作品を見る観点が変化し、友だち同士で認め合う回数が増えていきます。そして、クラスが持続的につながっていくのです。図工の授業を通して子どもたちの中に生まれた、授業を待ち遠しく思う気持ちや認められたという喜びが、途絶えることなく持続することで柔らかな雰囲気やクラスの絆へと変わっていくのです。図工には、そんな力が秘められています。



かったのですが、体重をかけて粘土板の上で伸ばす方法をいっしょにやってみたところ、目にわずかな輝きが見られました。そして粘土のやわらかい感触のおかげか、次第に主体的な活動へと変わっていったのです。粘土を伸ばしてどんどん長くするという触覚的な活動から、「楽しい」という思いが芽生えたようです。次に、やぶいた紙の形から発想して絵に表す題材を行ったときには、ゆっくりながらも最後までやり遂げることができました。

高学年になる頃には、学習に対して前向きで図工も大好き、おもしろいことを言っているクラスを和ませる存在へと成長

豊かな表現を保障する

いつもこちらを見て話を聞いているのに、なかなか指示を理解できず遅れてしまうAさんは、直接声をかけると、理解して活動を進めることができませんでした。のちに、片方の耳の間こえが生まれつき悪かったことがわかりました。

教室では、多様な特性をもつ子どもたちがいっしょに生活しています。それぞれの子どもが必要とする教育的支援も様々であり、「個に応じた指導」や「合理的配慮」が求められています。

私は、Aさんとの関わり以降、一人一人の特性をしっかりと把握するとともに、指示を視覚化することの重要性を改めて意識するようになりました。特に板書は、子どもがねらいや手順を自分で確認できるように、分かりやすく示すことが大切です。

材料や用具に関する配慮も重要です。粘土やクレヨンなどの材料は、扱いやすく仕上がりきれいなものが開発されています。用具も、誰にとっても安全で使



いやすいものへと改良が進んでいます。「左利き用はさみ」は今でこそ普通に販売されていますが、昔は普及していませんでした。材料や用具に関する情報に常にアンテナを高く張っておくことも、子どもたちの豊かな表現を支えるために重要です。

多角的な視点から支援を考える

複数の観点から支援の方法を探ることは、すべての子どもにとってよりよい授業を考えることにつながります。例えば、「何をかいたら(つくったら)いいか分からない!」と発想の段階でつまづいてしまう子どもがいます。発想のきっかけは様々ですが、友だちと話したり、友だちの表現に出合うことがきっかけになる場合もあります。班隊形で座る図工室の机は、互いの様子を見合い、情報収集するにはちょうどよい環境です。教室内を自由に歩き回れる「おさんぽタイム」を設けて、友だちと話したり作品を見たりできる時間を取り入れることも考えられます。

「一学期」、「一学年」といった長期的なスパンで俯瞰したときに、必要十分な

授業内容になっていくか点検することも重要です。平面・立体題材の偏りや、扱う材料・用具のバランスなどをチェックし、子どもたちそれぞれが楽しむことができる年間指導計画になっているか、見直してみましよう。

そして、常に忘れてはならないのが、子どもと対話し、子どもを知ることです。子どもたちに「これは何? 何をしているところ?」と聞いていくと、作品や活動を見ているだけでは分からない、その子の思いの深さを知ることが出来ます。直接関わることで、その子への助言や支援も変化していくはずですよ。

一人一人を見つめて

自分の思いを表出することが原点である図工では、一人一人を見つめ、一つの作品を大切に作る授業が受け継がれてきました。目の前の子どもに寄り添い、その子がどんな特性を持ち、どんな支援を必要としているか考えてみましょう。それが、「個に応じた指導」ひいては「すべての子どものための授業」につながるはずですよ。

様々な視点から支援を考えよう

- 視覚情報の整理 めあてや手順は、板書や掲示物を使って分かりやすく示そう。
- 材料や用具 子どもにとってより扱いやすいものがないか探してみよう。
- 発想のきっかけ 友だちとの関わりがきっかけになることも。環境を整えよう。
- 長期的なスパンで 「一学期」、「一年」を通して、授業内容に偏りがないか点検しよう。

✳️ まずは子どもと対話し、「今」の子どもを知ることから始めよう!

*合理的配慮: 障害のある子どもが、他の子どもと平等に「教育を受ける権利」を享有・行使することを確保するために、学校の設置者及び学校が必要かつ適当な変更・調整を行うこと。(参考: 文部科学省『特別支援教育の在り方に関する特別委員会報告』2012)

3 地域とつながる

松尾 暁子（福岡教育大学附属小倉小学校）

美術館や芸術家と関わって

美術館が近くにある場合は、どの学年でも年に一度は出かけて、実物の作品を鑑賞し、そのよさを十分に味わう機会をつくるのがよいでしょう。私は、北九州市立美術館に子どもたちと出かけて鑑賞活動を行い、作品を見て感じたことをもとに絵や立体に表す授業を行ってきました。実際に作品を鑑賞したことが子どもの見方や感じ方を広げ、表現のくふうにもつながりました。

また、地域に住む芸術家などを招いて活動する方法もあります。五年生で壁画の製作を行った際、地域で活躍しているイラストレーター兼デザイナーである作家の方を招き、子どもたちとともに活動していただきました。構想の段階から実際にえがく段階まで、作家と関わりながら製作したことで、自分の考えを一層明確にしながら表現方法を深く追求する姿が見られました。

美術館や地域の芸術家と関わるきっかけを見つけれず悩んでいる先生も

いると思います。美術館では、子どもを対象とした鑑賞プログラムなどを数多く展開していますし、実際の活動の様子や実績がアーカイブされています。また、地域に住む芸術家や作家活動をしている卒業生のことは、地域の会合などで思いがけず知ることができず、まず一度足を運んで、気軽に相談してみてはいかがでしょうか。

子どもと地域がつながる瞬間

まちづくり協議会・自治連合会・地元企業が主催する夏祭りや、子どもたちのかいた絵をもとに広報ポスターをつくらう、という話が持ち上がったこ

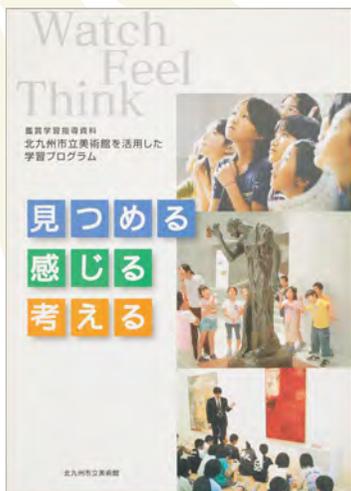
とがありました。

そこで、祭りに参加して楽しかったことを絵に表す授業を行いました。子どもたちは、毎年楽しみにしている祭りにポスターを通して関われることに喜びを感じ、製作への意欲を高めていました。友だちと射的を楽しむ様子や、浴衣を着て家族と花火を見る様子など、一人一人が自分の思いを絵に表すことができました。それらの作品を、主催者である地域の方々や企業の関係者が一枚一枚見て、ポスターに使用する絵を選びます。地域の方々にとっても、子どもの絵を見ることは子どもの祭りに対する思いや願いを知る機会になり、イベント運営の活力につながったようでした。祭りの絵を通して

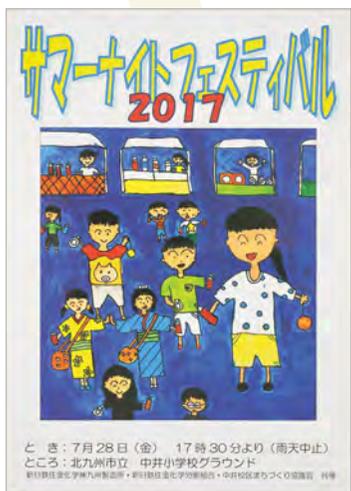
子どもたちの思いが伝わり、地域の人々の励みになったのです。

教師が「中継地点」となると

図工や美術は、作品そのものや「つくる」「表す」といった行為を通して、人々の関わりを生みだす力をもっています。そして、学びの場を地域に広げることが、子どもたちの学びを深め、地域の人々が子どもや学校のことを知ることにもつながります。中継地点となつて学校と地域をつなぐことが、教師の重要な役割の一つです。



▲北九州市内の小・中学校で行われた、美術館との連携授業の活動実績をまとめた冊子



▲地域の夏祭り、「サマーナイトフェスティバル」のポスター

地域にある資源を活用しよう

地域には、様々な資源が存在しています。これらを授業に取り入れることで学校の外にあるモノ・ヒトとの関わりが生まれ、子どもの学びを深める貴重な機会となります。

美術館・博物館

芸術作品などの展示物を実際に鑑賞したり、資料を閲覧したりできる。



パブリックアート

野外に常設展示されている作品なども、鑑賞活動に活用することができる。



公民館

地域の住民が集まる場。地域に関する資料の閲覧、情報の発信などができる。



芸術家など

地域で活動している作家や、地域の学校の卒業生が作家活動をしている場合がある。



ショッピングモール

学校と連携し、子どもの作品の展示などを行っているところも多い。



地域の住民

地域の行事などの運営を行っている。





授業実践 ① まぼろしの花 4年生・絵に表す活動
宮内 愛 (東京都 平和の森小学校)

1 授業をかんがえる

題材のきっかけ

花に魅かれるのは虫だけではありません、人も同じです。桜が咲けばお花見に出かけ、うれしいときも悲しいときも花を飾り、大切な人には花を贈ります。子どもたちも、生活科や理科の授業で花を育てたり、じっくり観察してスケッチしたりします。また、花は見る人に様々なイメージを喚起させたり、ときには心をもつものとして語られたり、人に例えられたりすることもあります。

実際に花を見ながら絵に表したりする題材もありますが、今回は、想像の世界に咲く「まぼろしの花」をかいてほしいと思いました。子どもの中で、「花」に対する馴染みのあるイメージと、「まぼろし」という不思議な言葉から引きだされるイメージとが混ざり合いながら展開していったほしいと思いました。一見相反するような二つのイメージを、「えがく」行為を通して結びつけることで、まだ見ぬ「まぼろしの花」に出会うことができるのではと考えました。

事前の準備

図工室の机の大きさは180cm×90cm。四人で使うことを想定して、紙の大きさは90cm×30cmにしました。子どもがうんと腕を伸ばしてやっと端まで届く大きさです。この細長い形は、「伸びる」「育つ」「つながる」といったイメージを引きだすきっかけになります。縦にも横にも使えるし、どこからかき始めてもOK。下から茎を伸ばしていこうか、花からかこうか、花は何種類もかこうか、などと子どもが考える瞬間が生まれるようにと考えました。また、自分のイメージを花に重ね合わせながら、体をいっばいに使ってかくスケール感を存分に味わえるように、体がぶつからないよう十分な広さを確保し、床の上でかくのもOKにしました。描画材は何度も重ねてかけるアクリル絵の具を選び、凸凹感やなめらかさが特徴の液体粘土も用意しました。筆、刷毛、ローラー、スポンジ、木べらなども用意し、材料や用具との関わりの中から多様な表現が生まれてくることを期待しました。

授業計画

時数

六時間

目標

誰も見たことも聞いたこともない「まぼろしの花」を自分なりに想像し、絵に表す。

評価規準

関 まぼろしの花を想像して、絵に表すことを楽しもうとしている。

発 まぼろしの花を想像して、伸びる茎や花などの表し方を考えこころ。

技 表したいところに合わせて、材料や用具の使い方を工夫している。

鑑 自分や友だちのかいた絵を見て、互いの作品のよさやおもしろさを味わっている。

展開

① 「まぼろし」「花」という言葉や、地の色をぬる活動を通して、どんな花が咲くのか想像する。

② 材料や用具の使い方を工夫しながら、自分の「まぼろしの花」を表す。

③ 互いの作品を鑑賞し、自分や友だちの作品のよさやおもしろさを味わっている。

2 授業をおこなう

導入の場面

今回は「まぼろし」という言葉の解釈は子どもに委ね、それぞれのとらえ方で「まぼろし」を表現してほしいと思いましたが、花自体を奇抜にえがいたり、花を取り巻く環境にフォーカスしたり、自身を花に投影したり、様々なアプローチが出てくるはずだと思ったからです。「まぼろしって何かな？」と問いかけると、「めったにないもの」「見つけにくいもの」「あるかないか分からない、夢みたいなもの」と答えて返ってきます。「今回は、自分の思う『まぼろしの花』を見つけてほしいんだ」と重ねて伝えました。

また、自分の思う『まぼろし』のイメージを探るきっかけにしてほしいと思い、画用紙に地ぬりをする時間を設けました。「自分の花に似合いそうな感じ」「こんな雰囲気の中に咲くよって感じ」と思う色を、自由にぬってみて」と言ってスタートしましたが、子どもたちはそれほど複雑には考えず、自分の好きな色を楽しくぬっている様子でした。



ある男の子が、「あ、すごい！」と声を上げたので見てみると、ローラーで青色をぬった上に白の絵の具を混ぜた瞬間、美しいグラデーションが生まれたことに感動していたのでした。何度も色を重ねていき、その子の中でだんだんと「空の色」のイメージになっていきました。

活動の展開

その子は、今度は空の下に小さな花をかき始めました。「こんなにきれいな空の下に咲くことができる」ということが、その子にとっての「まぼろし」になったようです。「目に見えない花をかきたい」

といって、筆に水だけをつけてかいていた子は、そこだけ地ぬりした色が薄くなって「透명한花ができた！」と驚いていました。真っ赤な画面に、少しずつ大きくくなっていく白い花をたくさんかいていた子に聞いてみると、「雲の花が成長していくところ」と教えてくれました。川に映る人の顔をかいている子に「花はかかないの？」と聞くと、「人は一人一人がまぼろしの花みたいな特別な存在だから、水に映っているのは花なんだよ」なんて答えが返ってきてびっくり。それぞれが、えがく行為を通して「自分なりのまぼろし」を発見していく様子は、私にとってもすごくおもしろい光景でした。

3 授業を振り返る

学びを振り返る

最後に、全体で作品を鑑賞する時間を設けました。子どもたちに作品を返却すると、「先生、こっちは○○さんの、そっちは○○さんのだよ」と友だちの作品をよく覚えていて驚きました。活動しながら、友だちのやっていることを実はしっかり見ているのです。

完成した作品が机に並ぶと、図工室がぱっと明るくなりました。普段は自由に見て回ることが多いのですが、今回は四人の班の中で自分の花について互いに伝え合ったあと、その班のおすすめ作品を一つ選び全体で紹介する、という流れに

しました。作品のどんなところをどんなふうに伝えれば、みんながその花のよさを感じるか相談する中で、形の理由や色の意味、作者が込めた思い、班のメンバーがおもしろいと感じたところなどを言葉にして伝え合う様子が見られました。全体への紹介では、八班分、八つの作品を鑑賞しました。「遠くから見ると、さっきと少し違って見える！」と気づいたり、各班で練りに練った紹介の言葉に頷きながら聞いていました。「紙からはみだすくらい大きな花がいいね」と感想をもらったクラスで一番小さい女の子がいました。その子が、花びらを一生懸命ぬっていたのを、みんなは

知っていたのです。紹介が終わったら、最後は自由に歩いてみんなの作品を改めて鑑賞します。どの作品にも、実はいろいろな思いが詰まっていることを知った上で見ると、見え方が変わってきます。一目見て「おもしろい！」と感じたことを、「どうしてそう感じたのかな？」と立ち止まって考えたり、全体紹介のときに聞いた製作過程のエピソードなどがつながって、見ることもっと楽しくなった様子でした。

子どもの変容

授業が始まったばかりのときは、私も子どもたちも、「花」をえがくものだとばかり思っていました。けれど、授業が終わる頃には、「花」というイメージを借りながら、それぞれの思う『まぼろし』を表現していたのです。自分の行為や実感、思いなど、実際にやってみて見えてきたことが、それぞれの頭の中にぼんやりと存在していた「まぼろし」のイメージに形を与え、表現が深まっていったのではないのでしょうか。

▼「たいふうのときにさく、はなのいえ」
液体粘土を混ぜた絵の具をぬっていたとき、モワモワした曇みだと思えました。だんだん台風ようになって、中から家の形が生まれてきました。



授業実践

② 雨の日の学校で

6年生・造形遊びをする活動

服部 真也 (奈良女子大学附属小学校)



1 授業をかんがえる

題材のきっかけ

外で遊ぶのが大好きな子どもたち。晴れの日の休み時間には教室が空っぽになり、子どもたちの楽しそうな声で運動場が彩られます。でも今日は雨。ただでさえ、雨の日はつまらないと思っっている子どもたちなのに、冬の雨の日は、空もどんより、気分も下がってひんやり…。そんな雨の日に、いや、そんな雨の日だからこそ、子どもたちが考えていることを知りたくなりました。

雨の日は、空から落ちてくる雨粒が普段の景色の見え方・感じ方をガラリと変えてしまいます。空気の匂いも、聞こえる音も、廊下の明るさも、子どもたちが過ごす場所も変わってきます。子どもたちは、雨の日の薄暗い廊下から、何を感じるのでしょうか。流れる雨水から、何を思い浮かべるのでしょうか。「いつもと少し違う、雨の日」に造形遊びをしたら、「いつもの場所の、新たなとらえ方」が子どもたちの中に芽生え、晴れた日とは全く異なる環境の生かし方や発想が生まれてくるかもしれない、と考えました。

事前の準備

活動場所や用意する材料を考えると、私は「子どもたちは、どんな活動を思いつくかな」と思い浮かべます。まず、「雨の音から発想を広げる子がいるかも」「廊下の薄暗い感じから思いつく子もいるかも」などと想像しながら、活動が生まれそうな場所を事前に見て回りました。実際に見て回ること、「手すりにひもを結びつけようと思いつくかも」「接着剤は何を用意しよう」「他学年の学習の妨げにならないかな」など、必要な準備や配慮に気づくことができます。場所の確認と同時に、用意する材料も検討していきます。「雨水の流れる様子をスズランテープで表現しようと思いつく子がいるかも」「色セロハンを使いたいという子もいるかな」というように、子どもがほしがりそうな材料や、用意しておいたら発想が広がりにそうな材料について考えました。今回の題材では、画用紙、色画用紙、色セロハン、スズランテープ、たこ糸、ビニル袋、プラカップ、針金、カラーペン、雨具を用意しました。

授業計画

時数

四時間

目標

雨の日の様子から感じたことをもとに場所や材料に関わり、イメージしたことを形や色で表現する。

評価規準

雨の日の様子から感じたことをもとに、様々な材料を使って造形的な活動に取り組もうとしている。

発

思いつき、周囲の様子を変化させることを思いついている。雨の日の特徴を生かし、イメージに合わせて材料の組み合わせ方や表し方を工夫している。

鑑

感じたことを話し合いながら表し方の意図や特徴を伝え、お互い美しさを感得している。

展開

① 雨の日の場所の特徴を伝え、イメージをこのように表すか考える。

② 雨の降る様子を感じながら、身近な材料を使ったり、組み合わせたりイメージを造る。

③ 雨の日や場所・材料の特徴を生かして表されたもののおさや美しさ、活動の意図について話し合う。

2 授業をおこなう

導入の場面

活動を始める前に、「雨が降り続く今、感じていること」をもとに、どの場所でのような表現をしたいかイメージを広げることができるよう、学校内を探しに行く時間を設けました。子どもたちはしゃがんだり見渡したりしながら場所を探し始めました。思いに合った場所を探す子ども、雨の日の校舎の様子から発想を広げる子ども、傘や長靴などの雨具から発想を広げる子ども……。子どもたちの中で、イメージがむくむくと動きだしました。



活動の展開

表したい場所や思いが見つかったら、二〜五人の班に分かれ、いよいよ活動開始です。廊下で活動を始めた班は、陽の届かない薄暗さから発想を広げ、LEDライトや蛍光灯、色セロハンなどを使って天井に星座を出現させ、プラネタリウムのように表しました。バルコニーでいくつも傘を重ねたかまくら（通称かさく）をつくった班は、雨の日も外で楽しく過ごせる場所がほしいという思いから、中の空間づくりにもこだわっていました。プール前のタオル掛けに、底に穴を開けたプラスチックを縦につなげて、雨粒が落ちていく様子を楽しもうと思いついた班もおうと、階段で雨の降る様子を表そうとした班は、色とりどりの開いた傘を吊るしたり、スズランテープを垂らしたりと、どんどん雨のイメージを広げていっていました。それぞれが抱いた「雨の日」のイメージは、班の中で共有され、互いに影響し、新たなイメージが湧き上がって、活動が広がっていきました。

3 授業を振り返る

学びを振り返る

「かさくら」グループのある子どもは、活動を振り返って、日記にこう綴っています。

私はいつも、バルコニーで休み時間を過ごしています。ここで友だちと話したり、悩みごとを相談し合ったりしています。今日は雨だから出られません。バルコニーに出ていつものように話したいのに、と朝からがっかりしていました。でも、今日は違いました。

私は幼い頃よく、部屋に干してある傘の中に入って遊んでいました。それを思いだし、雨に濡れないように傘を重ねたらバルコニーに出られると考えました。安定するように、雨が入らないように何度も重ね方をためすと、大きなかまくらのようにになりました。特にこだわったのは傘の「色の配置」と「材料の選択」です。グループで相談し、透明の傘を窓に見立てたり、明るい色の傘で気分が晴れるようにしたり、カラーポリ袋をカーテンのようにしたりして、中で楽しく過ごせるようにしました。さらに、中で座れるように、切ったスズランテープを入れた袋を敷きました。「かさくら」の中で楽しい会話ができ、造形遊びで私の夢がまた一つ叶いました。

子どもの姿容

「傘をさしたらバルコニーに出られる！」という感動から発想を広げたAさん。傘の重ね方には随分苦労したようでした。テープやひもを使わずに「かさくら」の形を維持する重ね方を考えたり、友だちと協力して雨が漏れないよう調整したり、傘の色の構成を考えたり、マットやカーテンをつくったり、と活動を通して学んでいく姿が見られました。

雨の日のどんよりした雰囲気も、子どもたちの手にかかれば楽しい雰囲気に早変わり。雨の日の環境を生かし、自分たちのイメージに合った表し方を模索する様子が見られ、図工の授業で培った力が発揮された題材となりました。

授業のあと、子どもたちは雨の日になるたびに校内を歩き回るようになりました。どうやら子どもたちは、「次はこんな表現してみよう」とニヤニヤしているようです。雨の日も子どもの豊かな発想と図工の魔法にかかれば楽しい一日になります。



あとかき

もしも、コンピュータが授業をしたら、
大量の情報を正確に提示できる点では、
人間より遥かに勝っているでしょう。

けれど、授業は単なる「情報提供の場」では
ありません。子どもたちと過ごした時間を糧に、
今日、そのときの、子どもたちに合った
授業を展開できるのは、先生だけなのです。

子どもたちと先生がつくる楽しい「図工の時間」が、
全国の教室に広がることを願っています。

